

抗うつ剤普及のポリティクス

立命館大学大学院 松枝亜希子

1 問題

向精神薬が治療一般に普及するのには、その薬効だけではなく、精神科医の肯定的評価や製薬企業の販売戦略などの産業化といった別の要素がある（松枝 2008）。抗うつ剤がいつ開発され治療実践に深く関与するようになったのか、いかなる歴史的な変遷を経て今日あるのかを明らかにする。抗うつ剤は「気分の落ち込み」や「不安」の軽減・除去に一定効果を発揮する。しかし、そのことは「不安」などの自己の性格要因と密接に結びついた感情を薬剤で操作することでもある。それが問題点であるゆえに、抗うつ剤を研究主題として選定した。さしあたり、今回の報告では、抗うつ剤の普及の要因および功罪を考察する。

2 方法

1950年以降の抗うつ剤への評価の歴史的変遷を検討する。抗うつ剤が開発・販売された1950年代以降、国内の医学言説、マスメディア、製薬企業の販売戦略などにおいて、抗うつ剤の使用・効用がどのように位置づけられてきたのかを文献資料を中心に時系列的に整理する。

3 結果

うつ病に対する薬物治療は1950年代後半から行われ始めたが、抗うつ剤が大量に流通する契機となったのは、「セロトニン再取り込み阻害薬（SSRI）」（代表的商品名：プロザック）の開発である。プロザックが1980年代後半から90年代前半に臨床現場に浸透した要因は、従来の抗うつ剤と比較して副作用が少なく安全性が高いという評価があったからである。それに加え、プロザックは米国の一般誌に、沈んだ気持ちを高めて内気な人を積極的な性格へと変える「幸福の丸薬」として紹介され、一般的に認知されるようになった（Kramer 1993=1997）。資料の分析を通して「うつ病治療には薬物治療が最優先されるべきである」という言説が支配的になった転機は、プロザックの発売にほかならないと言える。その浸透の結果、1990年以降の国内において、うつ病の「早期発見・早期治療」の啓発、うつ病の企業のメンタルヘルスへの組み込みを派生させたと言える。また同時に、抗うつ剤の普及は、それを服用する当事者にジレンマをもたらすこともわかった。それは「プロザックを飲むようになって私は非常に明るくなった。しかし、不安が消えた私は本当の私だろうか？」（Wurtzel 1994）という薬効による自己の連続性の揺らぎである。今後はこの問いをさらに追求することが必要である。

文献

- Kramer, Peter D., 1993, *Listening to Prozac*. Viking Penguin Inc (=1997, 渋谷直樹監修, 堀たほ子訳『驚異の脳内薬品——鬱に勝つ「超」特効薬』同朋舎).
- 松枝亜希子, 2008, 「向精神薬への評価——1960年代から80年代の国内外における肯定的評価と批判」『Core Ethics』4: 465-473.
- Wurtzel, Elizabeth, 1994, *Prozac Nation*. Houghton Mifflin (=2001, 滝沢千陽訳『私は「うつ依存症」の女——プロザック・コンプレックス』同朋舎).